

【会員投稿】

エンタΙΑをチャットGPTで読み解く

田畑 裕司

広島蒐郵会の会報「蒐郵」は、JPS中国・四国本部長の榎原 晃二氏によって編集されて、毎号楽しみにしています。今年の9月号には、「8月例会での入手品拝見から～「APOカバー」をChatGPTで解析」という、興味深い記事を拝見しました。これは、エンタΙΑの画像をAI（人工知能）に読み込ませて、解析をするというもので、早速試してみることにしました。回答には、間違いもありましたが、大変参考になりました。なお、本記事は、1日の使用量に制限が設けられている無料版を利用しました。

この封筒について、教えて (注) 枠内はプロンプト（指示文）です。



ChatGPT: この封筒はとても興味深い史料です。いくつかの点を整理しますね。

基本情報

- ・日付印：1943年7月6日（「WARRINGTON LANCS」とあり、イギリス・ランカシャー州ウォリントンから差し出されたことがわかります）
- ・宛先：1182319 A. C. I. W. H. CASELY
"British Prisoner of War"
Hakodate camp, N. Japan.
→ 英軍兵士 W. H. Casely（捕虜番号 1182319）、北海道の函館捕虜収容所宛

・左側のテープ：「EXAMINER 564」

→ これは戦時検閲ラベル。英国から出る郵便はすべて検閲され、番号付きの「EXAMINER」シールが貼られました。

・青色の縦書き印：俘虜郵便検閲済

→ 日本側でも検閲され、「捕虜郵便・検閲済み」の公印が押されています。下部に朱色の検閲印（係員の印）が見えます。

・赤字の「3」：検閲や仕分け上の管理番号の一種と思われます。

背景

・第二次世界大戦中、日本は北海道・青森などに連合軍捕虜収容所（函館分所を含む）を設置していました。

・英兵や米兵，オランダ兵などが強制労働に従事させられ，国際赤十字を通じて家族との通信が制限付きで認められていました。

・この封筒はイギリスから日本の捕虜収容所へ送られた郵便で，両国の検閲を通過して受け取られたものです。

封筒の意味

1 戦時検閲の実物例

英国側（EXAMINER 564）と日本側（俘虜郵便検閲済）が両方そろった貴重な郵便物です。

2 捕虜通信の痕跡

POW（Prisoner of War）宛の封筒は特殊な扱いを受け，通常の郵便物とは異なる経路を通りました。

3 歴史資料としての価値

個人宛の捕虜郵便は，戦時中の通信の実態や捕虜の所在，国際郵便ルートを知るうえで非常に貴重です。

ご希望なら，この封筒が **当時どんな郵便ルート（英国→中立国→日本）を經由したのか** や，函館捕虜収容所の詳細（収容されていた国籍・場所・労働内容など）についても調べて説明できますが，そちらもお知りになりたいですか？

知りたいです。 （追加のプロンプト（指示文））

ChatGPT:承知しました。では，この封筒が通った**郵便ルート**と，宛先である**函館捕虜収容所**について詳しくまとめます。

1. 郵便ルート（1943年時点）

第二次大戦中，イギリスと日本は当然直接の郵便取引ができませんでした。捕虜宛の郵便は，中立国や国際赤十字を經由して届けられます。

流れ（一般的な例）

1 イギリス国内から発送

- ・この封筒は 1943年7月6日に Warrington, Lancs から発送。
- ・英国検閲を受け、「EXAMINER」シールが貼られる。

2 中立国スイスの赤十字委員会へ

- ・ロンドンからスイス・ジュネーブの **国際赤十字（ICRC）** に送付。
- ・そこで日本行き捕虜郵便として仕分けされる。

3 中立国ポルトガルまたはアフリカ・インド経由

- ・船便・航空便で大西洋を渡り、中立港（ポルトガルのリスボンなど）に送られる。
- ・さらに中立国経由で日本へ。

4 日本に到着 → 検閲

- ・東京・横浜などの検閲局で「俘虜郵便検閲済」印が押される。

5 捕虜収容所に転送

- ・函館の捕虜収容所に届けられる。

※ この行程は数か月以上かかるのが普通で、手紙が実際に受け取られるのは発送から半年後ということも多かったようです。

2. 函館捕虜収容所について

（中略）

国際赤十字の記録によれば、捕虜たちは最低限の通信（葉書や封書、月数通まで）が許され、検閲のうえで家族や本国からの消息を受け取ることができました。

3. この封筒の意味

- ・ **史実と直結**：実際に英国の兵士が北海道の捕虜収容所に送られていたことを裏付ける資料
- ・ **郵便ルートの貴重な証拠**：イギリス検閲印・日本検閲印がそろっており、両国の検閲を経た「国際捕虜郵便」であることがはっきり分かる
- ・ **戦争遺産**：捕虜・家族の通信の一部が今に残ったもの

☞ ご希望であれば、当時の「函館捕虜収容所」の地図上の位置や分所の場所（例えば「函館第一分所＝山崎炭鉱」「小樽分所」など）を整理して図解することも可能です。

地図で見たいですか？

函館ではなくて、「福岡俘虜収容所」です。（追加のプロンプト（指示文））

ChatGPT:

なるほど！ありがとうございます。宛先に「Hakodate camp」とありますが、実際には「福岡俘虜収容所（Fukuoka POW Camp）」に宛てられた手紙ということですね。第二次大戦期、日本の捕虜収容所は非常に複雑で、場所や名称がしばしば混同されます。では **福岡俘虜収容所** について詳しく整理します。

1. 福岡俘虜収容所の概要

- **正式名称**：福岡俘虜収容所 (Fukuoka POW Camp)
設立：1942年（昭和17年）、九州に設置された捕虜収容所本部。
- **収容人数**：全体で数千名。
- **収容者の国籍**：イギリス、オランダ、アメリカ、オーストラリア、カナダなど連合軍兵士。
- **分所**：福岡第一分所（門司）、福岡第二分所（八幡）、福岡第三分所（飯塚）、その他20以上の分所が存在。
- 捕虜は炭鉱、港湾、製鉄所、工場などで強制労働に従事。
- 特に筑豊炭鉱や八幡製鉄所での労働は非常に過酷でした。

2. 郵便の取り扱い

- 捕虜宛郵便は「福岡俘虜収容所」本部で集配・検閲され、そこから分所に配達されました。
- 日本側の青色スタンプ「俘虜郵便検閲済」が押されているのはそのためです。
- 封筒に書かれた“Hakodate camp”という表記は、郵便経路や検閲の過程で誤記・転記された可能性があります。
- 当時は外国からの郵便が多く、英語表記を間違えて記録するケースが散見されます。

3. 郵便ルート（福岡の場合）

基本は函館宛と同じで、
イギリス → スイス赤十字（ジュネーブ） → 中立港（ポルトガルなど） → 日本（横浜など） → 東京検閲局 → 福岡俘虜収容所本部 → 各分所
という流れです。
このルートを経るため、差し出してから届くまで **数か月～半年** 以上かかるのが普通でした。

4. 意味と価値

- **誤記の可能性を含んだ実物史料**
宛先に「Hakodate」とありながら実際は「Fukuoka」であったとすれば、検閲や転送の過程の混乱を物語る重要な資料です。
- **検閲痕跡**（英国側“EXAMINER”，日本側「俘虜郵便検閲済」）が両方残っているのも非常に貴重。
- **収容所研究資料**として：捕虜の移動、通信の制限、郵便ルートの実態を知る手掛かりになります。

☞ ご希望であれば、当時の **福岡俘虜収容所とその分所の地図**（例えば八幡製鉄所、筑豊炭鉱、門司港などの位置関係）を図にまとめることもできます。
地図付きの解説をご覧になりたいですか？（注）ここで無料版の使用量オーバー